

2022年10月

大橋直紀

## ロータリー月例報告書 vol.4

留学先：レッジョエミリア音楽院（イタリア）

秋も深まり、例年に比べると暖かい日が続く北イタリアでも肌寒い日が増えてきました。フィレンツェは元より、さらに北に位置するレッジョエミリアでは霧がでていることも多く、朝夜はすっかり冷え込む時期となりました。音楽院の授業も10月下旬より少しずつ始まり、11月からいよいよ本格的に学校が動き始める見通しです。わからないことだらけで手探りの状態ですが、右往左往しつつも沢山刺激を受けながら過ごしています。

師事する先生についても無事決まり、マリーナ・コンパラートというメゾソプラノの音楽家の下につけることが決まりました。まだレッスンでは一度お会いしたのみですが、発声についても学びが多いほか、今まで関わってこなかった作品に触れる機会が多くなるように感じています。課題ややるべきことは多くなりますが、レッスンを受けながらこれから日々練習に取り組んでいくのがとても楽しみです。

一方で、フィレンツェから離れたことで周りに日本人はほとんどおらず、学校においても中国人含めアジア人自体がそれほど多くない環境下のため、改めて言語の壁を感じるが増えました。その中で一抹の不安や寂しさもありますが、自分を奮い立たせて気持ちを新たに取り組んでいきたいと感じています。

さて、今月はモデナの歌劇場にて行われたオペラと、フィレンツェの音楽院での公開卒業試験について写真を掲載します。今月私が観劇したのは、日本を題材とした「蝶々夫人」、またファウストが題材の「メフィストフェレ」の二つです。

「蝶々夫人」は、長崎を舞台とした没落藩士令嬢の蝶々さんとアメリカ海軍士官との恋愛を描いた悲劇で、中でも「ある晴れた日に」など人気の高いものが多く、単独で歌われる機会も多い作品です。また「メフィストフェレ」はゲーテの戯曲ファウストを元に書かれたオペラで、青年が魂と引き換えに青春を取り戻したいと悪魔と契約する物語です。グノー作曲の「ファウスト」と同じ題材でありながら、異なる作曲家によって曲調の異なるオペラが生み出されているということが非常に興味深く感じられる作品です。



オペラ「蝶々夫人」 観劇の合間に

今回、たまたまどちらのオペラでもアジア人が主役として舞台に乗っていたのですが、彼らの圧倒的声量とパフォーマンスは圧巻でした。素晴らしい能力を遺憾無く発揮することで、適切に評価される場があるということを改めて感じると共に、自分の声に合った役を勝ち取り役作りに励むその姿勢について、改めて考えさせられるとても良い機会だったように思います。

また今月は友人からの誘いを受け、フィレンツェ音楽院の公開卒業試験を聞きにいきました。四重奏などを含む一時間弱のプログラムでしたが、カウンターテナー（男性が高音域をファルセット（裏声）で歌う声部）の方の声色がとても美しかったです。オペラについて学びたいという意向の他に、本場でバロック音楽についてもこうして触れる機会を増やし、学びを深めたいと感じさせられる素敵な演奏でした。



オペラ「メフィストフェレ」 終幕の一場面より

学校の入学を介してさまざまな環境の変化の中にと強く思う日々ですが、これから自身がイタリアでできることは何かと改めて考え、その中で音楽に真摯に向き合っていきたいと感じています。環境の変化の中で別れもあり、新たな出会いもあり、それらもまた自身の糧として成長していけたらと願うところです。こうした環境で音楽やイタリアでの学びに没頭できることに日々感謝しつつ、これからも取り組んでいけたらと考えています。

末筆となりますが、今後とも皆様からの変わらぬご支援ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。



公開卒業演奏 試験会場のサロン



フィレンツェ 図書館からの夕日